

「沖縄の木材利用について」

内閣府沖縄総合事務局林務水産課 課長補佐 曲瀬川淳一

沖縄森林管理署報の寄稿ににあたり、本島を中心とした沖縄の林業及び木材の利用についての自分なりの考えを掻い摘んで述べたいと思います。

沖縄における林業を考えた場合、内地におけるスギ・ヒノキ等を利用した構造用の木材を生産する林業とは異なります。過去には沖縄においてもスギ人工林を造成した箇所もありますが、現在では風当たりが少ない谷間に残存木として存在している状況であり、ある一定の樹高を越えると台風等の強風による影響と見られる樹木の先端部の欠損が生じており、内地のスギと比較すると径級（幹の太さ）の割には樹高が低いようです。

場所を限定すればスギを植えることは可能と思われ、過去には北部ダムの建設によるスギの伐採が行われた際には良木も見られたとのことですが、風ばかりでなく亜熱帯特有の土壌の状況（腐葉土層が薄い）も影響することから、スギ人工林の造成は場所を選ぶことになってしまい、現在では沖縄に元々存在し、利用されてきたリュウキュウマツやイタジイ、イジュ等を主体とした森林整備が行われています。

木材を住宅・建設資材として見ると、沖縄の風景を見た場合、現在の木造建築物の代表としての首里城を除いては、そのほとんどがコンクリートを材料とした建築物となっています。戦前は茅葺き屋根等の木造住宅が首里城を取り巻いていましたが、戦争により消失してしまいました。

戦後の焼け野原からの復興に際しては、沖縄本島北部から南部の消費地へ良木の抜き切り等を行って供給された木材を使用した応急規格住宅や本土からの移入材を使用した木造住宅が建設されましたが、エマ台風の襲来により木造住宅等が倒壊し、米軍が建設していたコンクリート住宅が被害を受けることなく残ったことが、その後の住宅建築様式に大きな影響を与え、県内の木造住宅の建設の減少をもたらしました。

しかし、このような状況であっても、建設資材としての木材の利用は、復帰後の公共事業等における矢板等での利用やダム建設等に伴い発生したチップの生産があったことから、県外から輸入・移入される木材及び県内産木材の供給・消費は一定程度ありました。

なお、現在の興味を引くデータとしては、内地産材を主体とした本土のハウスメーカーが建築した木造住宅の建設の増加が見られています。

木材を原料として鑑みると、木炭、木工品、茸生産・養豚で使用するオガ粉が代表的なものになると思います。木炭は戦前・戦後を例にすると沖縄本島北部において伐採さ

れた木々を炭窯で炭にし本島南部へ供給し、南部の大消費地を支えていました。現在ではBQ等で利用する木炭が生産されています。

木工品についてはリュウキュウマツ等が有効に利用され、県内の木工製造者の技術向上もあって伝統工芸品ばかりでなく、新たな商品開発を進めており、某販売イベントでは顕著な県民の皆さんの購買が見られます。オガ粉については、県内における茸の生産における培地の原料として利用され、県内の茸生産の増加に役立っており、また養豚場における敷材としての利用もあります。

琉球の歴史的な三大政治家に蔡温（サイオン、1682～1761年）がいます。琉球の自然的・地理的・経済的条件に立脚して、森林・林業を林政、林業技術的に取り扱っており、その内容については戦争による文献の消失（一部）が惜しまれますが、その考えは現在の我々にも大変役立つ内容となっており、県内林業関係の支えとなっています。

また、先に述べましたように、沖縄本島における県民との林業の関わり合いは、過去と比べてしまうと細い関係となっており実感が湧きにくい状況はありますが、依然として県内産木材を県民の皆さんに供給している状況にはあります。

現在、やんばるの森を中心とする話題が新聞等で報道されており、世界自然遺産登録、自然環境問題等に関係して沖縄の林業が問われています。

この問いに少しでも正確に答えるためには、過去と現在を出来るだけ正確に把握し、将来の考えを構築する上での土台とし、また、沖縄の林業及び木材の利用等について県民の皆さんへ情報を伝える必要もあります。

島なりの林業というものを伝える術が持てるよう、今後も自分なりの触覚を伸ばして整理していきたいと思っています。